

風の末裔シリーズ・4th シーズンの8

～星の紛(まぎれ)～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「じゃあね！」

「また明日！」

パオの外に元気なルウシエルの声が聞こえて、微睡まどろみから覚めた。

もう、修練所の終わる時間か…。まぶたが張り付いて開かない。でも、周囲が明るいのに分かる。こんな真っ昼間に眠るなんて、とれだけ振りだろう…。

「あれ？」

ルウシエルのオドロキ声。いつもはまだ仕事か執務室にいるシドがいるから、ビックリしたんだろう。

「…しっ…」

シドの抑えた声。

「少し静かにして下さいね。ソラが寝込んでいるんです」

「…！ ソラ！ どっか悪くしたのか?!」

「ちょっと身体を冷やしたんです。大した事はありませんよ」

「ホントか…？」

心底心配そうな声。安心させてあげなくては…。

「…ルウ様…」

かすれた声しか出なかった。しまったな…。

「ソラ…」

神妙なオレンジの瞳が、そおっと覗いた。

薬湯の苦い味が残る喉で、なるだけ元気な声を出した。

「本当に大丈夫ですよ。一晩寝たらよくなります」

「…ごめん…」

ルウはソラの横に膝を着いて座った。

「私がここで楽しそうだから、そろそろ帰ろうって言い出せなかったんだろ？ …ごめん…」

「いや、そんな事は…」

砂漠育ちの西風の妖精は、寒さに弱い。どれくらい弱いかっというと、シドとソラが少年時代留学した最初の冬、二人共、体温が下がって動けなくなってしまった。二重に張ったパオの中で火と毛皮にくるまって何カ月か過ごす羽目になって以来、毎年寒くなる前に西風の里へ一時帰郷していたのだ。

「ホントはとっくに帰らなきゃならなかったんだよな。私が暖かい修練所で授業を受けている間、二人は寒風の林野で仕事していたんだ。ごめん…早く気が付かなきゃいけなかった」

「……………」

ソラがルウを見つめたまま黙っているの、シドがルウの肩に手を掛けた。

「さ、ソラ、ちょっと寝ろ。ルウ様、何かご用だったのですか？」  
「うん……」

ルウは自分の鞆から田当での書物を取り出したが、ちょっと考えて、また鞆にしまった。

「いいや」  
「ルウ様？」

「友達に書物を貸したら、返して貰わなくちゃならない。そしてまた、帰るのが延び延びになる」

「……」

「ソラが回復し次第、帰ろ。な、シド！」

「え……ええ……」

「ノスリ長に話を通しておいてくれ。でも一個頼まれてくれるか？」

「何でしよっか？」

「友達としみりしちゃうのが嫌だ。最後まで普通に過ごしていたい。出発の朝までノスリ長以外誰にも言わないで欲しい」

「ええ、分かりました」

「エノシラにも、おっさんにもだ」

「えっ？ ナーカ様にも？」

「あのヒト、すべメノメソするから堪らん」

「ええ……まあ、そうですが……。いいんですか？」

「ああ」

「シンリィには？」

「シンリィに隠しておくのは無理だろう？」

ルウは喋りながら、鞆の中からやっぱり書物と、他にも色々な道具……ルーペやら遠眼鏡やら……を取り出して、懐に入れた。

友達にあげる事にしたんだろう。

じゃあ、そういう事で……と、ルウは御簾を開けて出て行った。

残ったシドは、ソラの額の手拭いを取り替えようとして……、驚いた。

「……、具合、悪いか？」

「いや……」

「うん？」

「ちょっと……胸が一杯……」

「ああ、そうだな。僕もべっと来た」

シドは、目を真っ赤にして鼻をすする相棒の顔を、濡れ手拭いでぬぐってやった。

「老人達は洗ったけれど、無理を押し通してお連れしてよかったな……」

「本当に……よかった……」

我が儘で、自己中心で、他人の事など気にも掛けなかった、

こまっしやくれ娘。たった三ヶ月でこんなに変わるなんて、誰が予想出来ただろう。

「僕達が、見えていなかったただけなのかもしれないね」

ソラがかすれた声で呟いた。

「本当は、元々真っ直ぐで思いやりのある方だったんだ。それを表に出せる環境じゃなかったんだろう。西風の空気が…」

「…そうかもな…」

あちらへ戻れば、また長の後継者の冠が付いて回る。一部の老人はその上に『血の薄まった』を付ける。

「ナーガ様じゃないけれど、ルウ様、ずっとここで過ごさせてあげたい気分になって来たよ。ここの方がずっとあの方がいい」

「うん、シド、だけれど、僕達がそれを言っちゃ駄目だ。僕達だっここで学んだ事、持って帰らなきゃ」

「うん、そうだな」

外で元気な子供達の声がある。ルウの声も混じっている。

そうは言ってもソラは、自分の回復が出来るだけ日数が掛かればいいのにと、思ってしまうのだった。

\* \* \*

ソラが枕から頭が離れた。

まだ本調子じゃないけれど、明日から数日暖かい日が続くという。出立するなら明日しかないだろう。その日の仕事を一人

で終えてから、シドはノスリに話をきりだした。

「草原台地を抜けるまで、誰か同道させようか？」

ノスリは、ソラが倒れてしまつまで仕事をさせていたのを気に病んでいた。

「大丈夫ですよ。初っぱなに一気に暖かい土地まで飛んじやつて、あとはゆっくり行こうと思っっているんです」

「そうか。シドなら二人を連れて結構な距離を飛べるだろうが、無理するんじゃないぞ」

「はう」

執務室に置いていた私物を引き揚げ、外に出た。ルウ様に直前まで皆に言つたと頼まれていたけれど、執務室のメンバーには引き継ぎ上、早めに伝えねばならないだろう。

あと……。

里の中心を離れ、物置等がある場所を抜けると、一つポツンと新しいパオが立つ。春には寂しい焼け跡だったのが、夏の終わりに戻った時には、新たな住人が住んでいた。

この時間なら居るだろう。

「エノシラ」

「はい？」

そばかすのぼっちゃり娘が顔を出す。

「あら、シドさん。ルウは修練所の広場です。蹴り球の対決があるんですって」

「ああ、貴方に用事なんです」

「はーん」

「あら、まあ…」

ルウの帰郷を告げられたエノシラは、間延びした声で驚いた。「言われてみれば、何となく荷造りはしている感じていたねえ。そうか、行っちゃおうのか…」

「しんみりが嫌だから、直前まで言っとなって言われていたんですか」

「ふむ、ルウらしい」

「まだ、貴方の気持ちとか考える程、大人でもないモンで」

「そうね、教えてくれて有難う、シドさん」

エノシラはカゴと瓶を手にした。

「山羊飼い爺さんの所へミルクを買いに行かなきゃ。あと、粉と、干し林檎。今日はルウの好物づくしにするわ」

「感謝します」

二人は外へ出て、住居地域まで並んで歩いた。角を曲がった所で、どっかい肩幅にぶつかりそうになった。

「あら」

「おお、エノシラ、よかった」

大柄なサオ教官は、慌てた感じでシドに会釈してから、エノシラに向いた。

「ルウが明日あたり西へ帰ってしまうみたいなんです。何か聞いていますか？」

「あら、サオセンセには打ち明けたんですか？ 私は今さっきシドさんに教えて貰った所なんです」

「ああ、やっぱり…！」

サオ教官は太い首を横に振った。

「修練所でも、誰にも言っていないんです」

「ルウ様は最後まで普通に過ごしたいって誰にも内緒にしたがっていたんです。なぜご存知なのですか？」

「子供達が…」

「…？ 友達には打ち明けていたんですか？」

「いえ…」

センセが言っには、授業が終わって一旦帰宅した後、ルウの子分の子供達が修練所の裏庭で、顔を寄り合わせて何やらコチャコチャ相談していたらしい。

「お前ら、また女の子の更衣室に鴉を放り込む相談なんかして

いるんじゃないだろうな！」

「違うよ！ ルウの事だよ」

一番年長の子が、代表するように言った。

「ルウ、明日か明後日か、帰っちゃうと思うんだ」

「??？ ルウが言ったのか?」

「ううん、でも分かるよねえ」

「うん、分かる。大事にしてた書物をくれた」

「僕は星図を買った」

「僕はコンパス!」

子供達は口々に喋った。

「それにねえ、バレバシだよねえ」

「あれで隠してるつもりなんだもんね」

「へえ、そうなのか?」

「うん、センセ分かんない? 何でも無い物をボケっと眺めて

たりするんだ。机の節目とか、楡の木に残った最後の一片とか」

「蹴り球してても、失敗ばかりで」

「かと思つた、妙に優しくなったり、急にはしゃぎ出したり」

「ほお……」

「どうどう今日は、何喋っても声が上がってんの。ああ、これ

はいよいよだな……って思った」

「うん、思った」

「……」

「そんでさ、俺達で送別会してやるよと思つてさ」

「そうか、でも、内緒しておきたいルウにとってはどうかかな?」

「分かっているなあ、サオセンセ。何か月俺達のセンセやって

んの?」

「俺らがお茶とお菓子でルウを見送ると思つて」

「……」

「どうやら子供達なりのプランがあるらしいのです」

「あらあら」

「センセは監督していませんですか?」

「さあ、私が監督すると台無しにしそうですから。折角あんな

に楽しそうに「チャ」チャやってるのに」

「……」

「ああ、そつだ、急がなきゃ。執務室のシンリイを呼んで来る

よう、頼まれたんだ」

「シンリイを?」

\*\*\*

「……あれ??」

ルウが修練所の広場に来ると、誰もいなかった。頂上決戦や

るから絶対来いって言われていたのに。

約束がなくても、いつも誰かしら蹴り球しているのに、今日は人っこー人いない。最後の日に、蹴り球出来ないのか…。

「ルウ——!!」

大勢の声が響き、いきなり向かいの土手に、十何人の男の子が現れた。等間隔に立ち、手に手にシユロの葉を巻いた蹴り球を持っている。

「行くぞ! ルウ!!」

一番大きい子の声を合図に、皆一斉に蹴り球を投げ上げて、ルウ目掛けて蹴った。

「な、何だ! お前達…!! うわっ!!」

いくらルウでも、いっぺんに飛んで来る十何個の球の相手は出来ない。避けるだけで精一杯だ。

子供達は一斉に土手を駆け降りて、球を蹴りながらルウの周りを回った。

「へへん! この球、取ってみろ!」

「こっちだ、こっちだ! へっほこルウ!」

「お、お前らあ!!」

ルウはムキになって人数分の球を追い掛けた。取っては取られ、汗みどろになって…、何もかも忘れて熱中した。

気が付いたら全部の球をゴールポストに叩き込んでいた。

広場の真ん中で、大の字にひっくり返って、大きくお腹を上下するルウと、その周囲でゼエゼエ言ってる転がっている子供達。一番大きい子がズリズリと這いながら、オレンシの瞳の女の子に近付いた。

「すげえな、さすが俺らの親分だ」

「はあ…、ぜえ…当たり前…ぜえぜえ…前だ…」

「お前は、ずっと俺らの親分だ」

「……ぜえ…」

「お前が何処へ行っても。俺らが大人になっても」

「……………」

「お前ら、何やってんだあ?!

サオセンセが駆け寄り、エノシラとシドもシンリィを伴って後から歩いて来た。

「何って…、蹴り球遊びだよ、センセ。ちょっとハードだったけど。おあ、シンリィ、こっちこっち」

「シンリィは手招きされて、ほてほてと左右に揺れながら歩いて来た。エノシラとシドは歩を止めて遠くから見守る。」

「おあい、皆、並べ」

子供達は立ち上がってよろけながらシンリィの前に並んだ。

羽根の子供はキョンとしている。

「シンリィ、シユクフクって奴やってくれ。長さまがやるアレ」  
「おいおい、シンリィは長様じゃないぞ」

「俺ら、子供だもん。子供のシユクフクは子供にやっつて貰うの。話し合ったんだ。シンリィにシユクフクして貰って、俺ら、ルウに永遠の子分のチカイを立てるんだ」

「……………」

教官センセも黙った。子供は子供なりに…、いや、子供だからこそ、飾りなく大真面目に考えているのだ。この西風の娘に自分達が何を餞別にあげられるのかを。

「……………自分は要らない……………」

ルウが泥を払おうともせず、ヨロヨロと立ち上がった。

「そんな弱っちい子分要らない…。トモダチなら許す。トモダチになっしてくれ…」

冬の夕暮れの広場に薄日が射し、シンリィがにぼっと笑った。そうして、左手で自分の羽根を引っ張り、右手で小さな羽毛をを引き抜いた。

「シンリィ、？」

背伸びして緋色の羽毛を大きい子供の額にかざし、そしてその子に差し出した。一人一人の前に立ち、一枚ずつ羽毛を引き抜いてはその『シユクフク』を繰り返した。子供達は黙ってシ

ユクフクを受け、両手で羽毛を受け取った。

すうっと後に…、その時の子供の一人に尋ねたら、…本当に暖かく感じて、澄んだ気持ちになれたんですよ。あの頃確かに俺ら、天使と過ごしていたんです…と、懐かし気に答えてくれた。

最後にシンリィは、ルウの前に立った。

ルウには羽毛を抜かないで、皆の手の中の十数本の羽毛を順に指して、その指を額に当てた。ちよっとの間、シンとした。

「トモダチの儀式、終了！」

一人の子供が合図して、皆、糊が剥かれたように動き出した。

「凄いなあシンリィ、本当にシユクフクされてるみたいだった」

「カッコよかったぜ、チビ雀」

遠くから眺めていたシドも、エノシラと顔を見合わせた。子供はゴッコ遊びにだって真剣なんだ。

シンリィはエノシラと家路につき、残ったシドはサオセンセと、蹴り球に興じる『トモダチ達』を眺める。

「以前の子供達なら、いなくなる友達の変化に気付けなかったと思っんです」

「以前のっ」

「シンリィが来る前です。あの子と関わるようになってから、



誰に教わるでもなく、言葉に頼らず、ヒトの気持ちを推し量る、鑑かんがみる…という事をやるようになったんです、子供達には」

「……………」

「私は、まだまだ…、まだまだ、子供達に教えられっ放しです」「そうですね…、僕もです」

\*\*\*

とうもろこしの粉をミルクで練ったのを焼きながら、エノシラは炉端で刺繍を刺していた。以前からこっそり作っていたピノクの靴を、急ピッチで仕上げているのだ。

「こんな可愛い色、ルウは絶対自分で選ばない。だから、他人があげなくちゃ」

シンリイが覗き込んで、その鮮やかな色彩に目をパチクリした。

「ふう、ルウはこんな色好きじゃない…って心配？ 大丈夫、今は嫌いでも、きっと、ふと履きたくなる時が来る。女の子は一生の内、必ず可愛らしくなりたい時が来るの。だから少し大きめに作っているのよ」

ピノクに白と黄緑の刺繍を刺し終えて、エノシラはそれをルウの靴の底に突っ込んだ。

「少女になったルウにきっと似合うわ」

夕暮れて帰ったルウに特に何も聞かず、三人いつものように食卓を囲んだ。片付けを終えた後、エノシラは大きなゴザを引っ張り出した。

「そっち持って頂戴、ルウ」

「何が始まるんだ？」

「いいから」

パオの前にゴザを広げ、その上にシンリイを真ん中に三人仰向けに転がって毛布を被った。

「ちょっと寒いけれど…、三人くっ付いていれば大丈夫よね」

「ああ…」

「里の真ん中を離れているから、ここって真っ暗でしょ。その分、星が一杯見えてお得なの」

「ホントだな」

三人見上げる空には、冬の星座が鮮やかに浮かんでいた。

「ルウの故郷では星座は違つの？」

「ううん、ちょっとずれるだけ。それを考えると、天っておっさいんだな」

「地上が天から比べたら狭いのかもね」

「そうかもな…」

「ね、いつもの砂漠の星の話をして」

「ああ……」

「今日で完結させないでね」

「……………」

「好きだわ、ルウの星の話。だから終わらないで…、いつか聞ける続きを楽しみにしていたいの」

「……………」

少し間があって、西風の娘は話し始めた。

「凍てつく砂漠の夜は、昼間暖まった砂から上がる蒸気が、空と地上の間で留まるんだ」

「うん……」

「そしたら地上から見える星は、磨り硝子を通したみたいにボウッとぼやける。隣同士の星の瞬きがくっ付いて、風が吹くと空全体が震えるように煌めくんだ」

「へえ……」

「星の紛れ(まぎ)れって言う……」

「凄いね」

クウクウと小さな寝息が聞こえて来た。

「シンリィ、寝ちゃったな」

「冷えない内に、パオに戻りましょう」

「うん」

しかし、川の字の両端の二人は、お互いまだ話が残っていて、何となく動かないでいた。真ん中のシンリィの羽根が、頬をくすくすする。

「なあ、エノシラ……」

「ん？」

「私がいなくなつて…、もし、シンリィまでいなくなつたら、寂しいか？」

「……そりゃ、寂しいわ」

「……そう…だよな……」

「……シンリィも、一緒に行くの？」

「……うん……」

「何となく、そんな気がした。シンリィの様子が、ルウを見送る感じじゃなかったもの」

「……エノシラ……」

「砂漠ってカラカラなんでしょ？」

「あ？ ああ……」

「シンリィ、鼻と喉が弱いから気を付けてあげてね」

「……うん」



里へ来た時、ほとんど空っぽだった自分に、皆はどれだけのモノを注いでくれたろう。溢れそうなそれをこぼさぬよう、西風へ持って帰ろう。ここで買った沢山の種を、この羽根の子供と共に、咲かせて行く事…、それが、貰いっ放しの自分達の、これから成すべき事なんだ。

そう、自分だって、『巣落ちの雛鳥』だったんだ…。

「星の紛れ……」

ルウは口の中で呟いて、もう一度天を見上げた。沙漠だけで起こると思っていたけれど、蒼の里でもあるんだな。

だって、今、こんなに星がぼやけている…。

くおしまい

二〇一〇・五・二

